

# DayDream Dreamer

弦月

『……お前、絶対人生捨ててるだろ？』

三ヶ月ぶりに電話した親友からそんな言葉が飛び出したとしたら、誰だって答えに窮するに決まっている。

「……おいおい、俺だってまだ人生捨てたつもりはねーよ」

苦笑しながら、俺はそう携帯電話の受話器越しに答えた。

『充分捨ててるじゃねーか。テスト週間だっつーに勉強せず遊びまくって。それもお前進学かかった大事な……』

「判ってるって。けど、これ行かなきゃ絶対後悔するぜ？」

『お前、毎月同じこと言ってるよな』

電話の向こうで、軽く喉を鳴らして笑う音と、深くため息をつく気配。

「何だよ、お前成績とか気にしてんのか？らしくないなー」

からかうような口調でそう声をかけるが、彼の深刻な口調は変わらない。

「——ほっとけ。そんなわけで今月はついていけないよ。お前一人で港に行ってきた」

十分ほど会話を続け、最後に返ってきた答えは結局それだった。こっちも短く『分かった、じゃあまた』とだけ答え、電話を切る。

…この時期。テストの点数が進学に、偏差値に直結する。受験生、というありがたくも何ともない枕言葉がのしかかる今日この頃、か。

「……遊んでばかりもいられない、か……」

元々、自分は成績とかそんなものにこだわるような人間じゃない。けれど、さすがに周りにそわそわと落ち着かない空気が見え始めてくると自分だってその重荷を見て見ぬふりをしてばかりはいられなくなるというものだ——。

「……はあ……」

大きく、ため息をついて。再び道を歩き始めた、その時だった。

「——っ!？」

突然、向こう側から走ってきた男がぶつかってくる。胸に伝わる、強い衝撃。

「おっとお兄さん、失礼するよ」

嘲笑うような声が、耳元で聞こえたと思った瞬間——。

淡く眩しい何かが自分の胸の辺りで光って、消えた。そしてそのまま何事もなかったかのように、男は走り去って行く。

「……？何だったんだ、今の？」

思わず、胸の辺りに手を当ててぺたぺたと触ってみる。けど、もちろん何もない。その日はそのまま家に真っ直ぐ帰って、夕飯もそこそこにベッドへと倒れこんだ。

——次の日の朝。平日に学生が行く場所、なんて一箇所しかない。よく晴れた空、春のうらかな空気。……けれど、どんなにいい天気でも悪い天気でも学校へ行って机にかじりつき勉強をするのが学生であり、受験生という生き物なのだ…というかそうらしい。

だらけた身体を無理やり引き摺り起こして窮屈な制服に身を包み、学校へと向かう。

その途中で、ふと思い出す。

……そういえば、昨日は珍しく帰宅して一度もパソコンを立ち上げなかった。『彼女』の『ご主人様あ☆』の声を聞かない日はまずなかったのに。おかしいな。何を妄想しても、昨日までの魅

力を感じない。それはまるであのときめきを、情熱をどこかにまるごと置き忘れてきてしまったかのような感覚で――。

「……被害者、発見ですっ！」

その時、道の向こうに場違いな――明らかに場違いな少女を一人、発見した。何が場違いかといえば……まず何より、その格好だ。まるで魔女っ子のような三角帽子とマントとブーツ。そのすべてが目が痛くなるほどのショッキングピンクというのもどうなんだ？手には星型のステッキまで握られているし。見間違いか、さもなければ蜃気楼の類か何かだと信じたい。

彼女はあろうことか、俺の方を見て、俺の方に駆け寄ってくる。

「あなたも、盗られたですね？可哀想な方です」

どちらかといえば自分の場違いさに気付いていない彼女の方が可哀想な気がしてならないが。

「ちょ……ちょっと待ってくれ。俺、君みたいな知り合いはいないと思うんだけど？」

「！そうですね。自己紹介がまだでした。失礼しましたです」

そこで少女はびよこんと頭を下げて、

「わたし、花音って言うです。花音（かのん）・フローレット＝姫村（ひめむら）です。あなたは？」

「葉鳥……葉鳥 樹（はとり いつき）、だけど」

「判りましたです、葉鳥。実はですね――」

その時、彼女が不意に真剣な顔する。視線は、道の向こうの一人の男に釘付けにされていた。あれ？そういえばあの男、昨日俺がぶつかったのと同じ人か？

「――向こうから姿を見せてくれましたですか。探す手間が省けたです！」

そう言って、彼女が手に持ったステッキを両手で構える。次の瞬間、それは抜き身の日本刀に姿を変えていた。そして、それを振りかぶって男の方へと走り寄る――！

「――って君！危ないよそんなこと！」

思わず、反射的に俺は彼女を止めていた。

「じゃ、邪魔しないで下さい！早く、逃げられちゃうです！！」

すると例の黒い男は彼女の存在に気付いたのか、慌ててその場から逃げ出していった。その瞬間に男の手にやはり昨日と同じような光が灯って、消えたのが確かに見えた。

「ああ……逃げられちゃったですう……」

しおしお～、と少女がその場にへたり込む。手にした刀は今度はステッキに姿を変えている。

「君、一体何なの？新手の手品師とか？」

「手品じゃないです！本物の魔法です！」

思わず俺は彼女の額に手を当てた。……とりあえず、熱はなさそうだ。

「ということは天然か電波か……」

花音と名乗った少女はうなだれ、軽くため息をつく。

「そうですね。こちらの世界の方にいきなり信じろって言うのがどだい無理な話でした。説明が必要ですよ。実は――」

「……っていうかまず、その格好何とかならないかな？」

喋りかけた彼女の言葉を遮って、俺はそう言った。さすがに、この格好の少女と二人きりで会話、というのはなかなか・いや相当勇気が要りそうだ。

「ごめんなさい、これ仕事着で。ちょっと待って下さい、今着替えるです」

「き、着替え！？ここで！？」

驚く俺のすぐ隣で、彼女…花音がステッキを振る。――次の瞬間、信じられないことにそこには

制服.....セーラー服姿の少女がいた。

「一体、どんなマジックを？」

「だから、手品じゃなくて魔法です！！」

.....ああ。もう何だかさらに訳が分からない。

「で、君は一体何者なわけ？」

場所を近所の公園に移して。俺は花音を問い詰めた。俺の隣で、ベンチに座ってオレンジジュースをずびずびと飲み干しながら 花音は視線を惑わせる。

「そーですね。一体、どこから話したら良いものやら。とりあえず、わたしはこの世界の人間じゃないです。こちらの世界でいう『魔女』とか『魔法使い』とかいう存在に近いと思うです」

「……………え？」

『魔女』？『魔法使い』？『この世界の人間じゃない？』なんだ、それ？

予想だにしない展開に、完全に思考が停止する。……けれど、目の前の少女は真剣な表情で、嘘を言っている様子はまるでない。

「分かった。百歩譲って君が異世界から来たことと何かすごい力を使える、ってところまでは認めよう。……で？だとしたら、なんで『こっちの世界』にやってきたんだ？」

「それはもちろん、わたしが正義のヒロインだからです」

「……………は？」

開いた口が塞がらない、というのはこういうことを言うのか。言うんだらうな。

「あのさっきの黒い男、あなたも見ましたよね？わたしが追ってるの、あいつらなんです。わたしたちは彼らのことを『黒薔薇』という俗称で呼んでいるです」

「ふうん…で、あいつらが一体何をしていたっていうんだい？強盗？誘拐？それとも人殺し？」

何気なく俺が尋ねると、彼女はふるふると首を真横に振ってそれを否定した。

「まさか！でも、ある意味じゃそれと同じか、それ以上の暴虐かもしれないです。人の心を奪うんですから」

「人の心を、奪う？」

「はい。人の心を……もっと正確に言えば、その人が『大切に思うもの』や『信じてるもの』を奪ってしまうです。いわば心のオアシスとか、潤いとか、そんなものだと思ってもらえれば分かり易いですか。わたしたちはそれを『萌心（もえごころ）』と呼んでいるです」

「……………もっとマシなネーミングなかったのか？」

眉をひそめる俺に、だけど花音は真面目な表情を崩すことはない。

「なかったんです。あいつらはそれを集めて、世界を混乱に陥れようと画策してるです」

「それってもしかして、あの白い光？」

尋ねる俺に、花音が頷いて解説をしてくれる。

「まあ、光の色はその個人の特色によりますですが。例えば誰かに恋している人は赤かったり、桃色だったりどどめ色だったりもしますよ？」

「どどめ色はないだろ……」

「まあ、そんなわけでわたしは奴らから『萌心』を取り戻さなければなりません。それがわたしの仕事であり、使命なのです。というわけで葉鳥、お願いします」

不意にベンチから立ち上がったかと思うと、彼女は俺に向かって深々と頭を下げた。

「わたしについて来ていただけますですか？」

「は……？何で？」

「わたしの力の源は、誰かが何かを強く思う、その『想い』の強さなんです。わたしの力はその想いの強さと思う人との距離に比例する——つまり、より強い想いを持つ方により近くに居ただけの方が戦闘はずっと有利になるです」

花音の言いたいことも分からないでもないが、かといって二つ返事で快諾できるほど俺はお人よしでも単純でもない。

「で？何で俺なわけ？」

「わたしが見たところあなたはひとつのものに、非常に強く執着する——いえ失礼、非常に強く『愛情』を持つことの出来る方だと思うです。ゆえに『萌心』を奪われてもまだそうやって豊かな個性を発揮できる。心を奪われて廃人寸前にまでなってしまう方って結構多いですよ？でもあなたの場合……あなたの思いの強さが強すぎて、あいつらも一度じゃ奪いきれなかったんですね」

「……それは誉められてるのか？」

言って、花音が笑顔でにこっと首を傾げる。信頼されているらしいのは嬉しいが、何とも複雑な気分だ。

「とにかく、そんなわけで協力してもらいますよ？あなたがあそこで邪魔しなければとっくに片付いてた仕事なんですから」

「う……」

それを言われると痛い……。確かに、彼女の話が本当だとするなら俺は仕事の邪魔をしてしまった、ということになる。

「ってというか第一さ、日本刀はくないか？その格好で獲物がアレなら着物着るか、反対に魔女っ子がやりたいならステッキのままで戦った方が——」

「……そういうものですか？わたし、そこまで考えたことはあまりないです——ただ、自分の戦いやすいように、って——」

……魔女っ子コスが趣味じゃなくてあくまで戦闘用、と言う辺り花音は本当にいい性格してると思う。

「……ん？ちょっと待ってくれよ？ってことは——」

その時、俺は心と重大なことに気が付いてしまった。

「ってということはさ？つまり、それって自分の好きなように『魔法』で自分の好きな服や武器に変えられるってことなのか？」

「はい、それはもちろん。あくまで自分がこの目を見たことのあるもの、という制限はつきますですが」

「ふうん……」

それを聞いて『まほう』ってすげーなあ、と俺が素直に感心した、その時だった。

「……近い！」

「え？えええ？何が？」

「『黒薔薇』ですよ！奴らの一部が、この近くに居ます！葉鳥、この近くに若い人が多く集まっていそうな場所がありますですか？」

急に切迫した気配で、花音が早口で問いかけてくる。

「若い人？どういうことだ？」

「奴らは好んで若者を襲う習性があるんです。年齢的に若い方が持っている情熱が大きい割に、ささいなきっかけで失いやすい！つまり奴らにとっては『捕食』しやすい獲物なわけです！」

「分かったようでよく分かんねーけど……つまり、次も若い奴が狙われるってことだな。若者、若者……」

この街で、若者の集まりそうな場所、か……。商店街？デパート？それとも——

「いや、待てよ……今日は平日か！」

思わず学校をサボって忘れかけていたが、今日は平日だ。ということはこの周辺で一番若者が集まっている場所はひとつしかない！おまけに現在の時刻は午後の3時過ぎ、授業を終えた生徒

がぼちぼち帰りだす時間……！

「——学校だ、行くぞ花音っ！」

「は、はいっ！！」

叫んでベンチから立ち上がり、俺は花音に先駆けて公園を飛び出した。

「葉鳥！いい度胸してるじゃねえか、学校終わってから顔出すだなんて！」  
学校の校門をくぐろうとしたその時、何故かタイミングの悪いことに目の前に担任の先生が現れた。

「……ん？後ろに居るのは女の子か？このガッコの制服じゃないなあ、どこの子だ？」

「す、すみません！話はまた後で！！」

先生の脇をすり抜け、校庭に滑り込む。先生には悪いが、今はこんなところで油を売っている場合ではない。……どこだ？どこにいる？

「花音！何か感じるか？」

「はい。あの天井が丸い建物の中、奴らがいますです！」

そう言って花音が指差したのは、学校の体育館だった。そうか、放課後…今から部活動が始まる頃…何かに『熱中』した若者たちがいるのは確かだ。俺たちは体育館に駆け寄り、中の様子を窺う。

——中から聞こえてきたのは——

「……もう人間なんてやだ……」

「……人生楽ありゃ苦もあるさ……」

「……明日なんて来なきゃいいのに……」

悲哀と哀愁たっぷりのハーモニー。ステージに立っていた演劇部員も、ネットを張っていたバレー部員も、ラケットを手にしたバドミントン部員も、皆揃って体育館全体がお葬式状態だ。

「——完全に、やられちゃってますね」

「だな。奴らは、いないな」

そのまま俺たちは体育館を後にして、校舎の方へと入っていった。本当ならば放課後、授業を終えた生徒達が次々と教室を後にしていく——はずなのだが。そこにはどこか魂の抜けきった人が呆然と行き交う異常な光景が発生していた。だが、ここにも奴らの姿はない。

「ここにもいないのか。一体何処に？」

校舎をぐるりと一周するが、あの男の姿はおろか、怪しい人影を見つけることはできない。

「残るは旧校舎ぐらいだけだ」

旧校舎、近々取り壊しが決まっている古い学舎の方だ。普段は人がほとんど寄り付かないような場所だが、この時間ならば俺の同類たちが集まって部活動を始めているかもしれない。

「なあ、花音。もしかしてもう学校からはいなくなっちゃったんじゃないか……」

半信半疑で、俺がそう言いかけた、その時だった。

「いいえ、葉鳥、どうやらビンゴなのですよ」

そう言って、花音がステッキを構える。直後、朝見た光景の如くそれが日本刀へと姿を変えた。そして、敵を薙ぎ払う花音——。

「……制服に、刀はアリだな……」

その光景を背後から見ながら、俺は思わず呟いていた。

「何一人で納得してるですか、葉鳥！ちょっとは助けてください！こいつら、数が多すぎて…  
…切ってる側から増殖して行ってキリがないです！」

「助けてくれ、って言われてもな。俺にはどうしようも——」

——その時、不意に俺は彼女の言葉を思い出した。『彼女の力の強さは、想いの強さと比例する』、という。ということは——。

「……花音。銃は見たことあるか？」

「はい？どーゆーことです？」



「だから、拳銃は見たことあるか、って聞いてるんだ。いや、この際ハンドガンじゃなくてもライフルでもバズーカでもロケットランチャーでも構わない」

.....構わない、この際学校が壊れようとも。

「オートマなら見たことあるですけど。それでもいいですか？」

「上等だ、武器を変えてみる」

「分かりました」

再び、彼女が刀に両手を副えて両目を閉じる。ややあって、彼女の手の中に不釣り合いにも見える拳銃が出現した。

「.....このアンバランスさ加減が何とも言えないな.....」

「葉鳥！これでどう戦えていうですか！？」

「バカ、銃なんて撃つ以外に使用方法ないだろーが！ガンガンやればいい、後のことは気にするな！」

「.....はいっ！」

そして、彼女は獲物を手に影を一掃し始める。『魔法』で創り出したからかその銃には弾切れという概念がないらしく、鳴り響く銃声は一時も止むことがない。

「.....悪くない、これなら.....！」

そして俺は学生服の懐から携帯電話を取り出して、ある人物に電話をかける。

「——佐々木！今すぐ旧校舎の二階に來い！そうだ、今すぐ——部員全員引き連れて！」

相手の返答を聞くこともなく、さらに畳みかける。

「面白いことやってるぞ！お前たち好みの——ええい、説明するのがまどろっこしいから早く来ればいい！！」

そう一方的に吐き捨てて、通話をオフ。

「お前たち好みの、？.....違うな、これは間違いなく俺好み！」

電話に注意を取られて一瞬でも見逃すことがあったら勿体無い！

ややあって、電話を聞いてか銃声を聞きつけたのか奴らが皆揃ってばたばたと姿を現した。——その数、十四・五人、男子が半分以上だが中には女子も混じっている。

「——葉鳥、これは！？」

「見ての通りだ、彼女が敵と戦ってる！いいか、皆真剣に良く聞け！」

俺の声に、注目の視線が集まる。

「彼女に『萌え』ろ！それがすなわち彼女を応援することになって、彼女の力になる！！」

俺が言うまでもなく、こいつらはもうとっくに花音の虜になっているらしかった。

ある者は真剣に、ある者は狂喜乱舞しながら、そしてある者はどこから何時の間に持ってきたのかカメラで彼女を撮影している。

——当たり前だ、こいつらは皆俺と同じ漫研部員！俺と同じか、あるいはそれ以上ディープな世界に毎日どっぷり浸かってる！俺と同じく、たとえ奪われても奪いきれないほど熱い——二次元への——情熱に溢れ返っている奴ばかりだ！

だから花音の言葉どおりなら、これだけ強い『萌心』を持った人間が集まればその相乗効果で彼女の力はすごいことになるはず.....！

「は.....葉鳥、すごいです！力がどんどん溢れて来て.....わたし、戦えるです！」

「——ああ、だろうな、花音！けど、これだけじゃない、もっといけるぜ！」

その言葉に彼女は勢いよく頷き、次の言葉を待つように俺の方を振り向いた。

「一度、服を魔女っ子に戻せ！それから武器は.....そうだな、箒がいい！」

言われるがまま、花音の姿が箒を持った魔女っ子に変化する。彼女がその箒を一振りするごとに敵がばったばったと斬られて、吹っ飛ばされ、なぎ倒されてゆく。……この見かけによらないアンバランスな凶暴さがまたグー！！

「よし、次はメイドだ！白い清純なエプロンに、ハタキなんかどうだ？オプションでめがね！！」

「葉鳥！お前ばっかずるいぞ、俺にも……！」

「ずるい、あたしだって！花音ちゃん、頑張ってる！あたし、猫耳メイドは基本だと思うわ！」  
俺が花音に次々指示を出していくのを見て、こいつらの魂にも何か火がついたらしい。そこから先は、なんてゆーか……趣味と主義と主張のオンパレード！

「ろ、ロボットには化けれないのかな？肘からミサイル！」

「着ぐるみ！エプロン！ぐるぐるメガネ！」

「萌え～」「愛～」「胸キュン～」

……そして、どれだけの時間が経ったか。周りには、限りなく全壊状態に近い校舎とどこまでも全開状態の俺たちがいた。

立ち向かう敵は、すべて薙ぎ払った。振り返った花音が、はつらつとした笑みでウィンク。

「皆さん、ありがとうございます！正義は必ず勝つです——！！」

『花音ちゃ～～～ん！！！！』

大合唱が、夕焼けの空にこだました。

「……どうしても行っちゃうのか、花音」

そして、日が沈んだ夕闇の校庭で。俺は彼女と二人きりで向かい合っていた。

問いかけた俺の言葉に、少し寂しげに微笑みながら頷く花音。

「はいです。奴らの大部分にはかなりのダメージを与えたから黒薔薇はもう当分こっちの世界を襲えないとは思いますが。こっちにも向こうにも、悪漢はまだまだ腐るほどいるです。正義の味方に休みなどないのですよ？」

「そっか、頑張れな」

そう声をかける俺に、頷いて、彼女も真っ直ぐな笑顔を返してくる。

「葉鳥こそ。何があっても、負けちゃいけないですよ？そのままの葉鳥でいてくださいです」

「……どういうことだ？」

「言い損ねてましたけど。黒薔薇が狙えるのは、心にほんの少しでも迷いのある人間だけなのです。まあ、何の迷いもないぴかぴかな心を持って人などいないとは思いますが、だから……」

「そっか。俺の心が盗られたのは、俺が『迷い』を持っていたから、ってことになるのか」

俺の心の『迷い』——それはおそらく、テストとか受験とか進学とか将来とか、その辺のまどろっこしい問題に少しだけ人生に嫌気が差した、昨日の夕方のこと。

けど、いろいろあって今日一日花音と非常識に非日常的な時間を過ごして、分かった気がする。

どれだけ悩んでも苦しくて辛いことがあっても、見失っちゃいけないものがあるんだ、って。

そう、例えばそれは自分が純粹に楽しいと思えること、時間を忘れてのめりこめること。

どうせ人生なんて一回きりなんだ。ましてや自由な学生で居られるのはその中でも本当に限られた時間だから。だったらどうせなら、バカ騒ぎするしかない。ぱあ～っと咲いて散ればいい、今ちょうど目の前で匂を迎えている桜の花みたいに。

「そうだな、ちょっとあの時はらしくなかったな。俺、花音のおかげでまた再確認できたよ。今、俺が大切なもの……自分が何をしたいか、何が大切なのか。そして何より、一緒にバカ騒ぎで

きるあいつらがどれだけ貴重か、ってことも。サンキュー、花音」

「はい、です」

そして彼女は背を向けて、近くの桜の木の下に歩み寄った。

「さよならです、葉鳥。でもきっと、また……」

「そうだな、また会おうな」

強い、強い風が吹く。桜の花びらが一斉に舞い踊り、花音の姿が見えなくなった、と思った瞬間——。

「……もう、これでお別れか。寂しいな」

「キャ——っ！！？」

「——っ！！？」

悲鳴とともに頭上から、何かが降ってきた。それはそのまま俺の脳天にクリーンヒット。桜とともに星が眼前に散る。

「あ、いたたっ……」

「いたたた、ですう」

倒れた俺の上に乗っかっているのは、そして頭を押さえながら声を漏らすのは、見覚えのある姿と聞き覚えのある声で。

「かっ、花音！？どうして……帰ったんじゃないのか！？」

「それはもちろん、そのつもりだったですけど。どうやら、帰れなかったみたいです」

はう、と肩を落として軽くため息をつく花音。

「帰れなかったって、どういう？」

「自分で思った以上に、力を消費してみたいですわね～。調子に乗って色々チェンジしましたから」

そう言って、彼女はばつが悪そうに舌先をほんの少し出して、はにかむように笑う。

「葉鳥。もう少しだけ、お世話になれますですか？」

「……仕方ないな。俺の責任でもあるし、面倒見てやるよ」

「ありがとうございます！葉鳥、恩に着るです～」

こうして、俺の家に奇妙な居候が一人、転がり込んだ。これはまだほんの序章に過ぎなくて、これから俺たちは他にいくつもたくさんの騒動に巻き込まれていくわけで、けどそれは、また別のお話なわけで。

「花音、割烹着はどーかな？」

……それはまた、別の機会にでも。

〈END〉